

〈論文〉

日本語教育における方言教示の実態

山野 栄子

キーワード：日本語教育，方言，実態，アンケート，日本語教師

1. はじめに

本稿は日本国内の日本語教育における方言教示の実態を，日本語教師（以下，教師）へのアンケートによって明らかにするものである。「方言」は「地域方言」を指す。アンケートは2009年4月から7月にかけて行った。回答者は30都府県の33日本語教育機関・施設・団体で，有効回答数は263人であった。表1は回答者を地方別に示したものである。（ ）内が回答者数である。北海道と四国はデータが得られなかった。

表1 地方別回答者数

東北地方(15)	岩手(4)，宮城(4)，秋田(1)，山形(2)，福島(4)
関東地方(46)	茨城(3)，千葉(17)，東京(14)，神奈川(12)
中部地方(90)	新潟(11)，富山(6)，石川(8)，福井(3)，山梨(2)，長野(3)，岐阜(7)，静岡(14)，愛知(36)
近畿地方(37)	大阪(22)，兵庫(10)，和歌山(5)
中国地方(30)	岡山(20)，広島(6)，山口(4)
九州・沖縄地方(45)	福岡(7)，佐賀(22)，長崎(3)，熊本(5)，宮崎(2)，沖縄(6)

2. アンケート結果

2.1 方言を教えたことがあるか

QA-1 日本語学習者に方言を教えたことがありますか。 1 はい 2 いいえ

上記質問に対する答えは，263人中，「はい」は152人(58%)，「いいえ」は111人(42%)であった。地方別に示すと図1のようになる。引越しなどで，方言を教えたのがアンケート回答時の

在住地ではない可能性もあるが、全体としては大きなずれにはならないと考える。図中の60というのは「はい」「いいえ」の最高人数である。

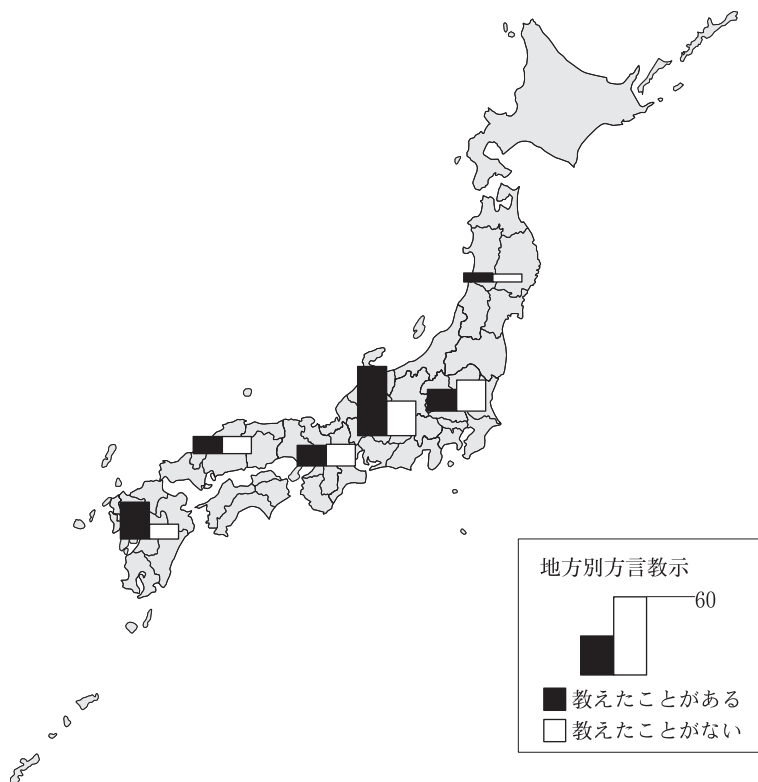


図1 地方別方言教示

関東地方と近畿地方が「教えたことがない」人の方が多い（近畿地方はひとりの差であるが）。中部地方と九州・沖縄地方の「教えたことがある」と「教えたことがない」の差が著しい。その理由を探るために、教師の方言教示への関与度を地方別に見てみる。

2.2 なぜ方言を教えたか

「方言を教えたことがある」と回答した152人に、なぜ教えたかを答えてもらった。

- 1 ニーズがあった
2 必要があると判断した
3 使っている教科書に記載があった
4 その他（ ）（複数回答可）

「1 ニーズがあった」「3 使っている教科書に記載があった」は教師の消極的関与、「2 必要があると判断した」は教師の積極的関与、「その他」は内容に応じて筆者が判断した。例えば「学生から質問があった」は消極的、「方言はその地方の文化の一つだから」は積極的などである。

図2はその結果を割合で示したものである。「記入無し」というのは、「4 その他」を選択したが、()に何も記入がないということである。

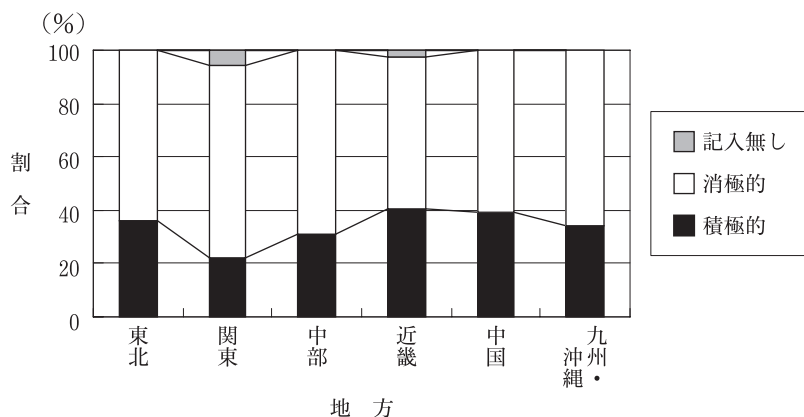


図2 教師の方言教示への関与

中部地方と九州・沖縄地方の教師の積極的関与度は、他の地方に比べて高いわけではない。これはつまり、中部地方と九州・沖縄地方の「教えたことがある」と答えた人は、学習者側からの働きかけに答え、その結果教師の方言教示の機会が多くなったと言える。中部地方と九州・沖縄地方の「教えたことがある」と「教えたことがない」の差が著しいのは、学習者が方言に接することが多いからと考えられる。

図2からは、関東地方の積極的関与の割合が、他の地方に比べて少ないこともわかる。

2.3 どの地方の方言を教えたか

さらに方言を教えたことがあると回答した152人に、どの地域の方言を教えたかを答えてもらった。複数回答で、地方別にして割合で示したのが図3である。

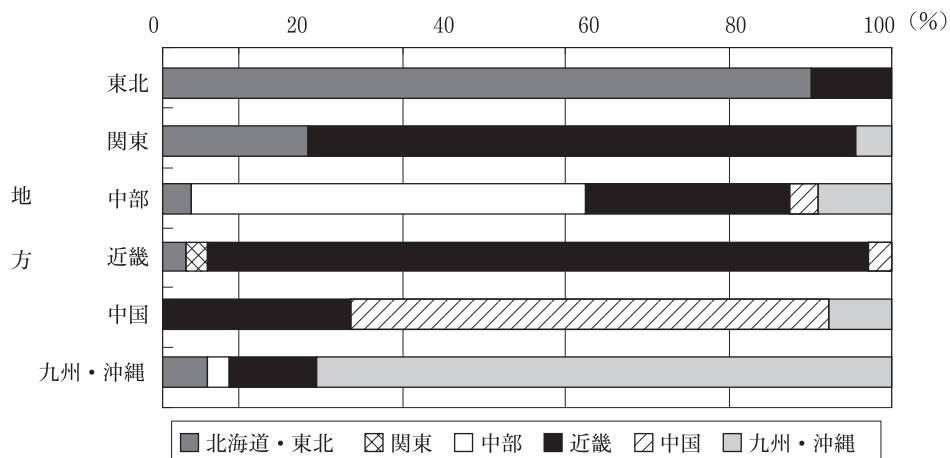


図3 教示方言割合

近畿地方の方言が全国的に教えられているのがわかる。これはテレビの影響が原因と考えられる。関東地方以外はどの地方でも地元の方言を教えている。関東方言を教えたと回答したのは、近畿のひとりであった。近畿地方の地元の方言教示の割合が極めて高い。

2.4 日本語学習のどのレベルで教えたか

方言を教えたことがあると回答した 152 人に、学習者のレベルを「初級」「中級」「上級」の中から選んでもらった（複数回答可）。その結果を図 4 に示す。

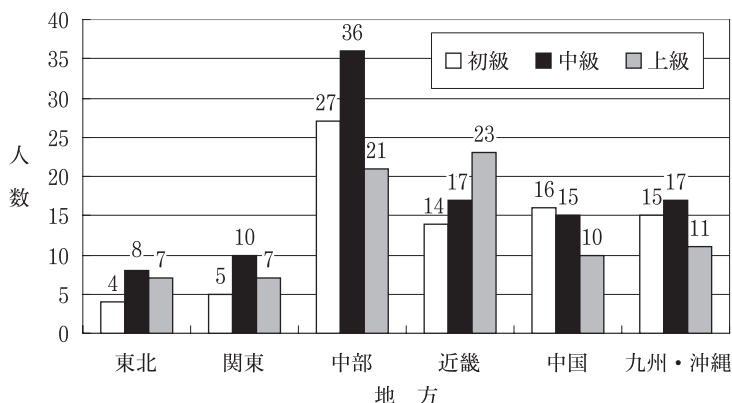


図 4 レベル別方言教示

近畿地方が上り階段状で、中国地方が下り階段状である。その他の地方は中高になっている。近畿地方は学習が進むにしたがって教える機会が多くなっていることがわかる。反対に中国地方は、初級の早い段階から教え始め、徐々に機会が少なくなる傾向があるようだ。その他の地方は、「中級」の段階が一番教える機会が多い。基礎的なものが定着するのを待って、教えるというところであろう。

2.5 教材

方言教示経験のある 152 人に、次の質問を行った。

- QA-5 教材は何を使いましたか。
- 1 自作のプリント
 - 2 テレビの録画（ ）
 - 3（ ）という教科書
 - 4 その場で質問に答えたので、何も使わなかった
 - 5 その他（ ）

複数回答である。教師の負担が大きい順に「作成物」「テレビ類」「教科書類」「その場」とし、「その他」も内容によって筆者が 4 分類に振り分けた。例えば、「グループで作ったプリント」などは「作成物」、「インターネット」などは「テレビ類」、「新聞」などは「教科書類」、「アクセントの

例」などは「その場」にした。地方別に集計したものが図5である。縦軸は人数である。

どの地方も「その場」が多い。ただ中国地方は「作成物」と「その場」が同数である。関東地方以外はすべて中折れ型である。

関東地方は、方言教示に関しては他の地方に比べ、特異である。原因は、必要度の判断、優先順位、教師の意識などが考えられる。

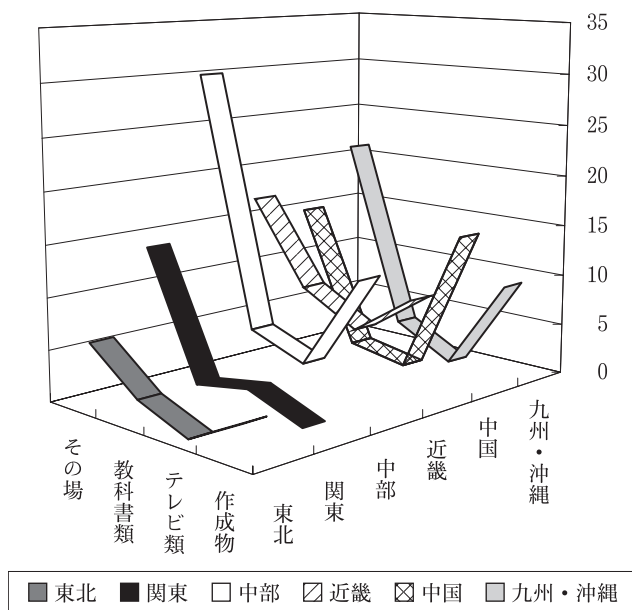


図5 方言教材

「教科書類」に挙げられたものには、『初級及び中級日本語』（秋田）『おいでませやまぐち』『聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』『ウチナー事情入門』『日本語バイリンガルへのパスポート』（沖縄）『みんなの日本語聴解タスク』『みんなで使おう金沢ことば』『大阪学』『日本語ジャーナル』などがあり、「テレビ類」には、「芋たこなんきん」「舞妓は一ん」「ちゅらさん」「純情きらり」などがあつた。

3. まとめ

教師が方言をどう取り扱うかというのは、どの地域で教えているかということと大きく関係している。今回の調査では、全体としては西高東低になっている。西部の方が東部に比べて方言教示に熱心であると言える。さらに関東地方は方言教示に関しては、他の地方と比べ特異であることが浮き彫りになった。

4. 今後の課題

今回の調査では方言教示に対する教師の意識と、方言教示の対象者についても調査をしている。これらについては、同時に調査した「若者言葉」と合わせて、筆者の修士論文で明らかにする予定である。